

UNIX基礎

基礎生物学研究所

ゲノムインフォマティクス・トレーニングコース

大規模な生物データ解析のためのUNIX入門

三輪朋樹 (miwa@nibb.ac.jp)

PCでUNIXを使うには

Mac	OSX自体がUNIX (#1)	アプリケーション→ターミナルを起動 UNIX端末として使用できる
	リモートログイン	UNIXサーバへリモートログイン ターミナルからsshを使用する
Windows	Cygwin	Windows上で動作するUNIXライクな環境
	VMware + Linux	仮想マシンを構築してLinuxそのものをインストールする
	リモートログイン	UNIXサーバへリモートログイン TeraTermからsshを使用する

#1) フリーウェアなどのインストールが必要な場合は「OSXでのUNIX環境構築方法」を参照

実習 1

● UNIX環境を確認

1. Dockメニュー → ターミナル 起動



2. bias4.nibb.ac.jpにログイン

```
$ ssh <username>@bias4.nibb.ac.jp
```

```
ssh <username>@bias4.nibb.ac.jp
```

(ターミナルの在処は、アプリケーション/ユーティリティ)

講習を始める前に

● コマンドプロンプト

- 端末に表示されている”\$”や”%”などの記号

今回の環境は `[user_name@bias4-login~]$`

- コマンド入力待ちの状態を表す

続けてコマンドを入力し、改行キーで実行する

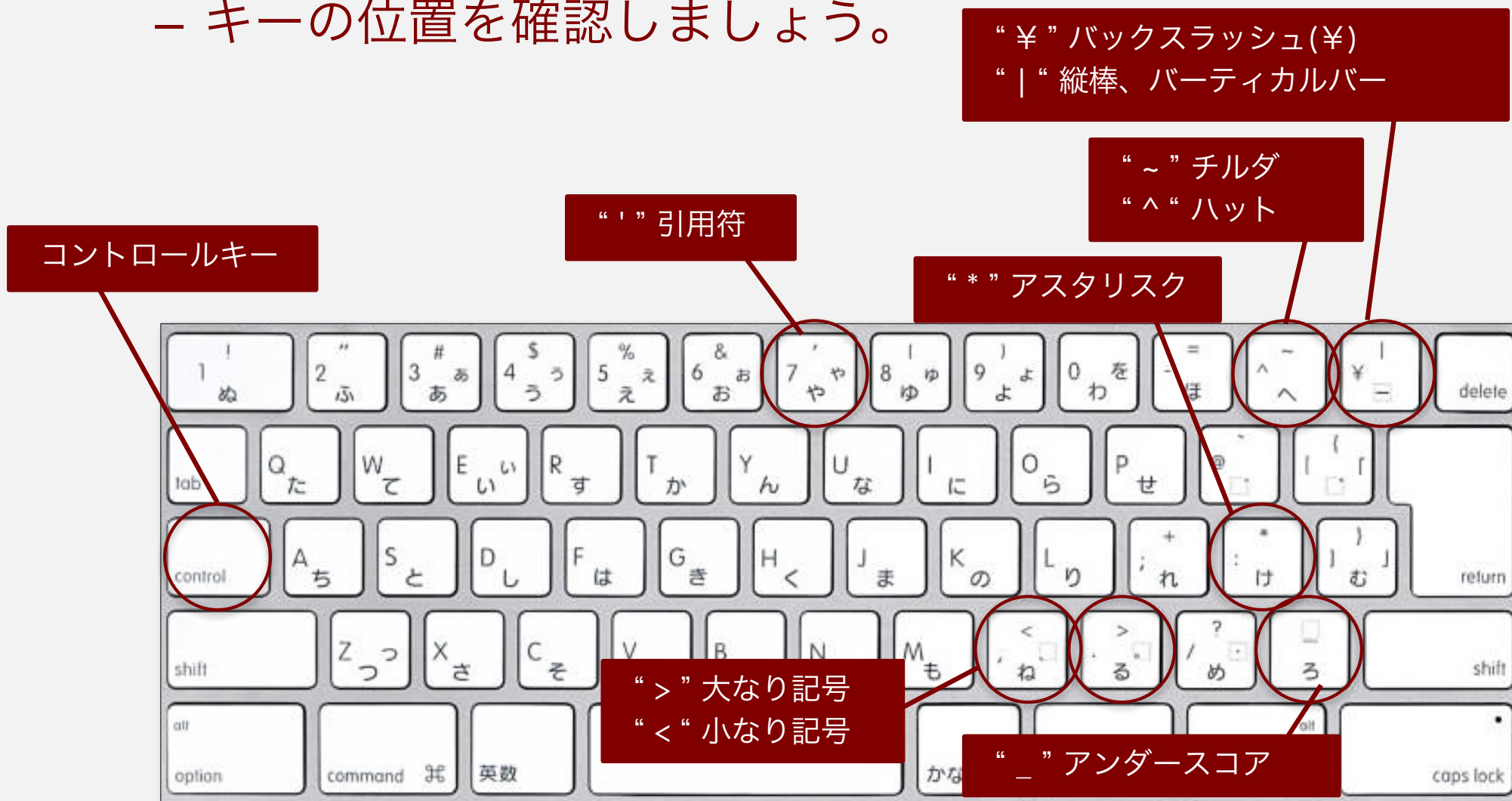
● ASCII文字

- コマンドの入力は全て半角のASCII文字を使用
- 入力文字が全角になる日本語IMEはOFFにする

キーボード配置の確認

- 普段使用しない記号を多用します。

- ー キーの位置を確認しましょう。



ファイルシステム

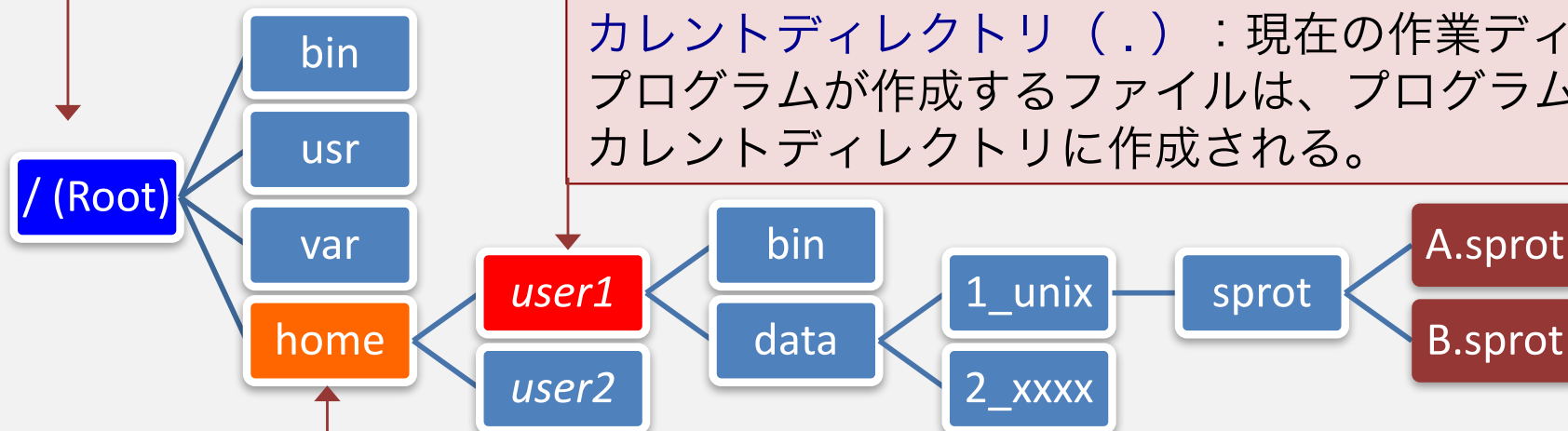
階層型ディレクトリ

トップのルートディレクトリ下に、子ディレクトリ、孫ディレクトリがあり、ファイルを配置する

ルートディレクトリ（/）：ファイルシステムの頂点

ホームディレクトリ（~）：個々のユーザ専用ディレクトリ、ログイン直後最初に位置するディレクトリ

カレントディレクトリ（.）：現在の作業ディレクトリ、プログラムが作成するファイルは、プログラム起動時のカレントディレクトリに作成される。



親ディレクトリ（..）：カレントディレクトリのひとつ上のディレクトリ。ドット2つで表記する。

ファイル／ディレクトリの指定方法

● パス (Path)

- ファイルやディレクトリの位置の記述方法
- ディレクトリをスラッシュ” / ” で区切る
- 「絶対パス」と「相対パス」 2通りの記述方法

● 絶対パス

- ルートディレクトリから目的のファイルやディレクトリへの道筋の記述
- 行頭は必ずルートディレクトリ ” / “ となる

例) `/home/<user>/data/1_unix/sprot/A.fasta`

● 相対パス

- 起点となる現在位置から目的のファイルやディレクトリへの道筋の記述
- 行頭はスラッシュ “ / “ 以外で始まる
- 例) `data/1_unix/sprot/A.fasta` (カレントディレクトリは `/home/<user>`)
- 上位ディレクトリはドット 2 つ “ .. ” で記述する

例) `../user2` (同じ階層の `user2` ディレクトリ)

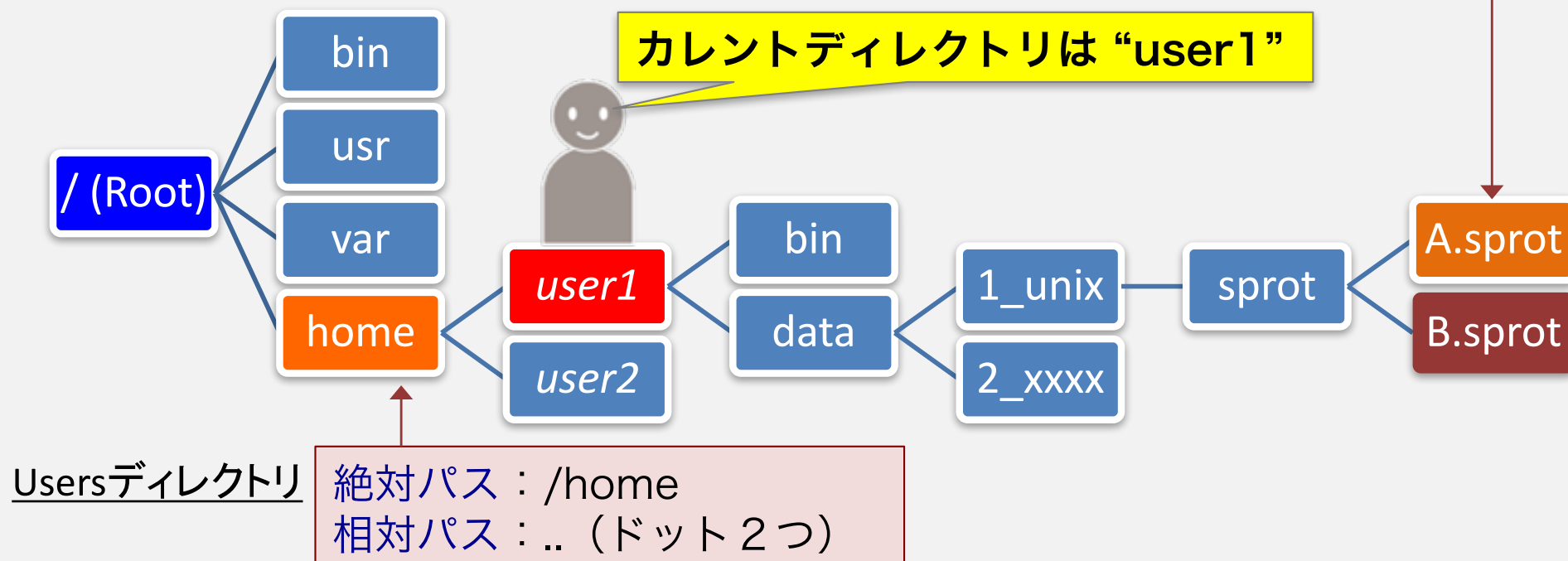
ファイル／ディレクトリ名の指定方法

user1 ユーザがログイン直後 :

A.sprotファイルとUsersディレクトリへのパス表記

A.sprotファイル

絶対パス : /home/user1/data/1_unix/sprot/A.sprot
相対パス : data/1_unix/sprot/A.sprot



ディレクトリの中身を見る (ls)

- ls

- カレントディレクトリの内容（ファイル名のリスト）を表示する

- ls ディレクトリ名

- 指定したディレクトリの内容を表示する

\$ ls data dataディレクトリの内容を表示

\$ ls / ルートディレクトリの内容を表示

\$ ls .. ひとつ上のディレクトリの内容を表示

\$ ls . カレントディレクトリの内容を表示 (lsと同じ)

- ls -F

- ファイル名の末尾に種類に応じた記号を付けて表示する

/ : ディレクトリ、@ : シンボリックリンク、* : 実行権付きファイル

- ls -a

- ファイル名の先頭がドット (.) で始まる隠しファイルを表示する

.login : ログイン時に実行される処理を記述したファイル

.bash_profile, .bashrc : シェル起動時に実行される処理を記述したファイル

実習2

● ディレクトリの中身を見る (ls)

1. ホームディレクトリ上でlsと入力してリターンキーを押す (=実行)

2. 続いて下記のコマンドもそれぞれ実行する。

\$ **ls ..** ホームディレクトリのひとつ上の中身を見る

\$ **ls /** ルートディレクトリの中身を見る

3. 隠しファイルを表示する。

\$ **ls -a**

補完機能

- コマンド名やファイル／ディレクトリ名の補完
 - ファイル名を途中まで入力して、タブキーを押す
“ls da” と入力して、タブキーを押す
 - 一意に決まらない場合は、一意になるところまでを展開する
“ls data/1_unix/sprot/143”と入力後タブキーを押す
 - それ以上展開できない場合は再度（つまり2回）タブキーを押すと、候補ファイルの一覧を表示する
“ls data/1_unix/sprot/1433”の状態でも2回続けてタブキーを押す
- 以下のメリットがあるので積極的に活用すること
 - キーボード入力を省略できる
 - 素早い入力が可能
 - 複雑なファイル名の入力ミス防止
 - うろ覚えのファイルでも入力できる
 - コマンド名も補完できる

実習3

● ファイル名の補完

1. ホームディレクトリ上で `ls un` と入力後、`<tab>` (タブキー) を押してファイル名の補完機能を試してみる。
2. 続けて `ls data/1_unix/sprot/143` まで補完機能を使って動作を確認する。

```
$ ls data/1 <tab>
```

```
$ ls data/1_unix/
```

```
$ ls data/1_unix/sp <tab>
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/143 <tab>
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/1433
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/1433 <tab><tab>
```

```
.... (候補一覧表示)
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/1433B_H <tab>
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/1433B_HUMAN.
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/1433B_HUMAN.f <tab>
```

```
$ ls data/1_unix/sprot/1433B_HUMAN.fasta
```

コマンドヒストリと編集

● 過去に実行したコマンドの呼び出しと編集

キーバインド	説明
Control + p (↑キー)	ひとつ前のコマンド (P <u>revious</u>)
Control + n (↓キー)	ひとつ後のコマンド (N <u>e</u> xt)
Control + b (←キー)	カーソルを左に移動 (B <u>a</u> ck)
Control + f (→キー)	カーソルを右に移動 (F <u>o</u> rward)
Control + a	カーソルを行頭に移動 (stA <u>r</u> t)
Control + e	カーソルを行末に移動 (E <u>n</u> d)
Control + u	行全体を削除しバッファへコピー
Control + k	カーソルから後を削除しバッファへコピー
Control + y	バッファの内容をペースト
Control + l (エル)	現カーソル行を画面上部に移動、画面消去

ファイル名のみ変更するなど長い入力行の一部を修正できるので、活用すること

実習4

● コマンドヒストリ

1. **Control + P** (コントロールキーとPを同時に押す) を何度か入力する。
2. **Control + N** を何度か入力する。
3. 表示されたコマンドラインのカーソル移動を行う。

Control + B

Control + F

Control + A

Control + E

ディレクトリを移動する (cd)

- cd ディレクトリ名

- 指定したディレクトリに移動する
- カレントディレクトリの変更

\$ cd data dataディレクトリに移動

\$ cd .. ひとつ上のディレクトリ(..)に移動

\$ cd ~/data ホーム(~)下のdataディレクトリに移動

- cd

- ディレクトリ名を省略すると、ホームディレクトリに移動する

- pwd

- カレントディレクトリの確認

実習5

● ディレクトリを移動する

1. カレントディレクトリを確認する。

```
$ pwd
```

2. ディレクトリdata/1_unixに移動してpwdを入力する。

```
$ cd data/1_unix
```

```
$ pwd
```

```
$ ls
```

3. sprotdディレクトリに移動し、カレントディレクトリを確認する。

```
$ cd sprotd
```

```
$ pwd
```

ワイルドカード

- ファイル名を指定するときに使う「任意の文字」
- パターンマッチにより複数のファイル名を一度に指定

- アスタリスク (*) : 任意の文字列 (0文字以上)

```
$ ls *.fasta
```

```
$ ls *_HUMAN*
```

- クエスチョン (?) : 任意の1文字

```
$ ls 1A2?_HUMAN.fasta
```

- [文字列] : []に含まれる文字中の1文字

[12345]は[1-5]と書くこともできる

[!文字列]で含まれない1文字

```
$ ls 1A2[1-5]*.fasta
```

- {文字列1, 文字列2} : "文字列1"または"文字列2"

```
$ ls 1A25_HUMAN.{fasta,phylip}
```

実習6

● ワイルドカード

(カレントディレクトリは ~/data/1_unix/sprot)

1. 下記コマンドを実行して、ワイルドカードの動作を確認する。

```
$ ls *.fasta
```

```
$ ls *_HUMAN*
```

```
$ ls 1A2[1-5]*.fasta
```

```
$ ls 1A25_HUMAN.{fasta,phylip}
```

```
$ ls *
```

ファイルの内容を一括表示する(cat)

● cat ファイル名

- con-cat-nate

つなぐ、連結する

- ファイルの内容を表示

`$ cat 1A25_HUMAN.fasta`

- ファイル名を複数指定すると内容を連結して表示

`$ cat *.fasta`

実習7

- ファイルの内容を一括表示する。

(カレントディレクトリは ~/data/1_unix/sprot)

1. 下記コマンドを実行する。

```
$ cat 1A25_HUMAN.fasta
```

```
$ cat *.fasta
```

ファイルの部分表示(head,tail)

- head [-行数] ファイル名

- ファイルの先頭から指定した行数を出力
- 行数を省略すると10行出力

```
$ head 1A25_HUMAN.sprot
```

- 巨大なファイルの内容を簡単に確認する場合に便利

- tail [-行数] ファイル名

- ファイルの最後から指定した行数を出力

```
$ tail -20 1A25_HUMAN.sprot
```

- “-n +行数”とすると、先頭から数えて指定された行以降を出力

```
$ tail -n +2 1A25_HUMAN.fasta
```

(FASTAファイルの配列のみ表示、コメント行は表示しない)

実習8

● ファイルの部分表示

(カレントディレクトリは ~/data/1_unix/sprot)

1. 下記コマンドを実行する。

```
$ head 1A25_HUMAN.sprot
```

```
$ tail -20 1A25_HUMAN.sprot
```

```
$ cat 1A25_HUMAN.fasta
```

```
$ tail -n +2 1A25_HUMAN.fasta
```

ファイルの中身を見る(less)

● less ファイル名

- ファイルの内容を閲覧する
- ページの移動には独自のキー操作が必要

キー操作	説明
f, SPACE	1ページ先へ進む
b	1ページ前へ戻る
j, k	1行ずつ前(j)後(k)へ移動
g, G	ファイルの先頭(g)、末尾(G)へ移動
/文字列	文字列の検索、n,Nで前後のヒット行へ移動
q	終了

実習9

● ファイルの内容を見る

(カレントディレクトリは ~/data/1_unix/sprot)

1. 1433B_HUMAN.sprotの内容をlessコマンドで見る。

`$ less 1433B_HUMAN.sprot`

2. ページを順に表示して、元に戻る。

`<space> , b , j , k`

3. ファイルの末尾に移動してから、先頭に戻る。

`G , g`

4. “binding”文字列を検索する。

`/binding`

5. 次にヒットする場所に移動する。

`n`

6. lessを終了する。

`q`

ディレクトリの作成と削除 (mkdir, rmdir)

- mkdir ディレクトリ名

- 新規ディレクトリの作成

```
$ mkdir unixtest
```

- rmdir ディレクトリ名

- ディレクトリの削除

```
$ rmdir unixtest
```

- ディレクトリ内にファイルがあると削除できない

実習10

● ディレクトリの作成と削除

(カレントディレクトリは ~/data/1_unix/sprot)

1. ホームディレクトリに移動後、実習用のディレクトリunixtestを作成する。

```
$ cd
```

```
$ pwd
```

```
$ mkdir unixtest
```

2. 作成したunixtestディレクトリに移動し、カレントディレクトリを確認する。

```
$ ls
```

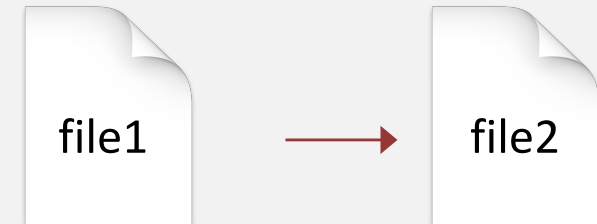
```
$ cd unixtest
```

```
$ pwd
```

ファイル/ディレクトリのコピー (cp)

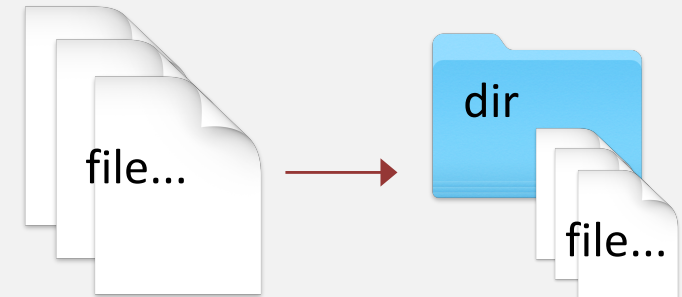
- `cp file1 file2`

- file1 のコピーをfile2として作成



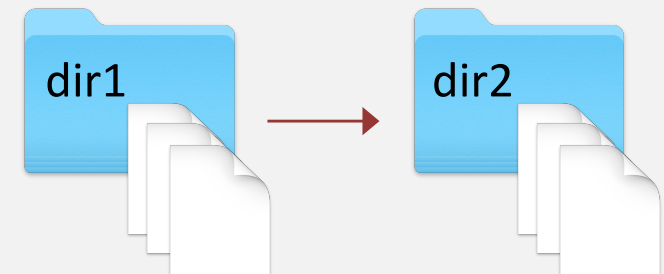
- `cp file1 [file2...] dir`

- file1 (,file2,...) のコピーをdir内に作成



- `cp -r dir1 dir2`

- dir1 をdir2としてディレクトリごとコピーを作成
- コピー先のディレクトリが存在する場合は、そのディレクトリ以下にdir1として作成



同一名ファイルが存在すると上書きされるので注意

実習11

● ファイルのコピー

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. ~/data/1_unix/sprot/1433B_HUMAN.sprotをカレントディレクトリにコピーする。

```
$ cp ~/data/1_unix/sprot/1433B_HUMAN.sprot .
```

2. コピーした1433B_HUMAN.sprotを更にcopyfileという名前でカレントディレクトリにコピーする。

```
$ cp 1433B_HUMAN.sprot copyfile
```

3. Fastaという名前のディレクトリを作成する。

```
$ mkdir Fasta
```

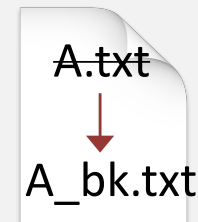
4. ~/data/1_unix/sprot/以下のfastaファイル（.fasta拡張子を持つファイル）だけを、3.で作成したFastaディレクトリにワイルドカードを使用してコピーする。

```
$ cp ~/data/1_unix/sprot/*.fasta Fasta
```

ファイル/ディレクトリ名の変更、移動 (mv)

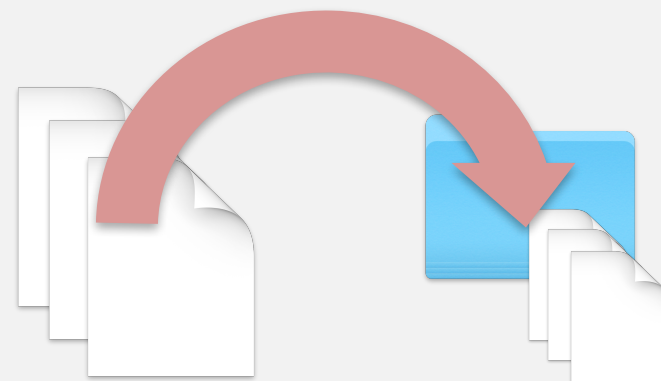
- `mv file1 file2`

- file1 の名前を file2 に変更



- `mv file1 [file2...] dir`

- file1 (,file2,...) をdir内に移動



同一名ファイルが存在すると上書きされるので注意

実習12

● ファイル名の変更とファイルの移動

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. copyfileの名前をnewfileに変更する。

```
$ mv copyfile newfile
```

2. 新規にHumanディレクトリを作成。

```
$ mkdir Human
```

3. Fastaディレクトリ内のHUMANが付いたファイルのみをHumanディレクトリに移動する。

```
$ ls Fasta/*HUMAN*
```

```
$ mv Fasta/*HUMAN* Human
```

実際にワイルドカードを使用して移動や削除を行う場合は、事前にlsで対象のファイルを確認すること。

シンボリックリンクの作成 (ln -s)

- ln -s ファイルorディレクトリ名 シンボリックリンク名

- ファイルorディレクトリの「別名」を作成
- macOSのエイリアスやWindowsのショートカットに相当

```
$ ln -s Human/1433B_HUMAN.fasta .
```

Human/1433B_HUMAN.fastaのシンボリックリンクをカレントディレクトリ(.)に作成

- オリジナルのファイルが移動・消去されると、シンボリックリンクを通じた参照はできなくなる

- 用途

- 他ディレクトリへの容易なアクセス

```
$ ln -s ~/data/1_unix/sprot .
```

よく使うディレクトリをホーム配下にシンボリックリンクする

実習13

● シンボリックリンクの作成

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. Human/1433B_HUMAN.fastaのシンボリックリンクをカレントディレクトリに作成する。

```
$ ln -s Human/1433B_HUMAN.fasta .
```

2. 作成したシンボリックリンクファイルの内容を表示する。

```
$ cat 1433B_HUMAN.fasta
```

mvやcpと同様に、最後の引数がディレクトリの場合は、そのディレクトリ上にオリジナルと同じ名前のシンボリックリンクが作成される。

参考：-sオプションを付けない場合は、ハードリンクと呼ばれ、オリジナルファイルを移動・消去してもリンクを通した参照が維持される。ただし、ディレクトリのハードリンクが作れないことや、ボリュームを跨いだハードリンクが作れないなどの制約がある。

ファイル情報の表示 (ls -l)

- `ls -l` ファイル/ディレクトリ名

- ファイルの大きさや更新日などの情報をリスト表示

- `ls -lt` ファイル/ディレクトリ名

- 日付順に表示

```
$ ls -l 1433B_HUMAN.sprot
```

```
-rw-r--r-- 1 nibb staff 21675 2011-03-09 05:23 1433B_HUMAN.sprot
```

アクセス権

ハードリンク数

所有者

ファイルの種類

– : 通常のファイル

d : ディレクトリ

l : シンボリックリンク

グループ

サイズ

更新日付

ファイル名

実習14

● ファイル情報の表示

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. カレントディレクトリの詳細情報リストを表示する。

```
$ ls -l
```

2. 詳細情報を更新日時順に表示する。

```
$ ls -lt
```

ファイルのアクセス権

- 全てのファイル／ディレクトリに付けられている
 - macOSやWindowsでは気にしないが、UNIXでは意外と重要
- 誰に対して、何ができるか
 - 誰に対して：
 - (u) ファイルの所有者
 - (g) 同一グループの利用者
 - (o) その他
 - 何ができるか：
 - 「読む(r)」 「書く(w)」 「実行する(x)」
 - 「実行する(x)」
 - ファイルをプログラムとして実行できる
 - ディレクトリの場合は「移動が可能」 「そのディレクトリへアクセスできる」

アクセス権モードの確認

● ls -l ファイル/ディレクトリ名

```
$ ls -l myfile  
-rwxr-xr-x 1 nibb staff 21675 2011-03-09 05:23 myfile
```

r w x **r - x** **r - x**

所有者
(u)

グループ
(g)

その他の利用者
(o)

r: 読み出し
w: 書き込み
x: 実行権

r: 読み出し
-:
x: 実行権

r: 読み出し
-:
x: 実行権

アクセス権モードの変更

● chmod [モード] ファイル名

- ファイルのアクセス権モードの変更
- モードの書式を記述する

\$ chmod u+x file 所有者に実行権を与える

\$ chmod go-rwx file 所有者以外のアクセスを禁止

- 8進数3桁で各ユーザのレベルを列挙

\$ chmod 600 file 所有者のみ読み書きできる

	所有者(u)			グループ(g)			その他(o)		
パーミッション	r	w	x	r	w	x	r	w	x
8進数	4	2	1	4	2	1	4	2	1
設定値	合計値			合計値			合計値		

実習15

● アクセス権の確認と変更

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. カレントディレクトリにあるディレクトリ、ファイルのアクセス権を確認する。

```
$ ls -l
```

2. newfileのアクセス権から 自身のRead権限を削除する（本来はこのようなことはしません）。

```
$ chmod u-r newfile
```

3. lessでnewfileを読む。

```
$ less newfile
```

エラーになります。

4. 再度newfileのアクセス権に自身のRead権限を追加する。

```
$ chmod u+r newfile
```

5. lessでエラーなくnewfileが読めることを確認する。

```
$ less newfile
```

ファイルの削除 (rm)

- rm ファイル名 ...

- 指定したファイルを削除する

- rm -rf ディレクトリ名

- ディレクトリの中身を確認なしで全て消去した上でディレクトリを削除する
- 確認しながら消去するには `rm -ri` とする

- 「ゴミ箱」はありません

- 削除したファイルを復活することはできません
- ワイルドカードを使用したファイルの削除は注意
必ず `ls` で対象ファイルを確認しましょう

実習16

● ファイルの削除

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. newfileを削除する。

```
$ rm newfile
```

2. Fastaディレクトリ全体を削除する。

```
$ rm -rf Fasta
```

コマンドの実行

UNIXコマンドの基本形

ls -l gbrel.txt

コマンド

オプション

コマンドの動作を
変えるスイッチ

オペランド

ファイルなどコマン
ドが処理する対象

引数

コマンドマニュアルの参照 (man)

● man コマンド名

```
$ man ls
```

[]で囲まれている引
数は省略可能

NAME

ls - list contents of directory

SYNOPSIS

ls [-RadLCxmlnogrtucpFbqisflAMSDP] [names]

DESCRIPTION

For each directory argument, ls lists the contents of the directory; for each file argument, ls repeats its name and any other information

指定可能なオプション

is sorted alphabetically by default. When the current directory is listed. When several arguments are given, the arguments are first sorted appropriately, but file arguments appear before directories and their contents. ls processes supplementary code set characters according to the locale specified in the LC_CTYPE and LC_COLLATE environment variables [see LANG on environ(5)], except as noted under the -b and -q options below.

下線付きは変数

man -k keyword でkeywordに関連するコマンド一覧を表示

実習17

● マニュアルの参照

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. lsコマンドのマニュアルを表示する。

```
$ man ls
```

行数・単語数のカウント (wc)

● wc ファイル名

- ファイルの行数、単語数、文字数を出力

```
$ wc 1433B_HUMAN.fasta
```

```
6  25 481 1433B_HUMAN.fasta
```

(6行、25単語、481文字)

- ファイル名を省略するとキーボード入力に対して実行

```
$ wc
```

```
This is a pen.
```

(Control-D)

```
1  4  15
```

(1行、4単語、15文字)

実習18

● 行数・単語数のカウント

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. 1433B_HUMAN.fastaの単語数をカウントする。

```
$ wc 1433B_HUMAN.fasta
```

2. キーボードから"This is a pen."を入力し、その単語数をカウントする。

```
$ wc
```

```
This is a pen.
```

```
(Control-D)
```

パターン検索(grep)

● grep パターン ファイル名...

- ファイル中でパターンを含む行を出力

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot
```

1433B_HUMAN.sprotから GO を含む行を検索

```
$ grep ^FT 1433B_HUMAN.sprot
```

1433B_HUMAN.sprotから FT で始まる行を検索

(“^” は行の先頭を意味する)。

- grep -v とすると (オプション -v) パターンを含まない行を出力する。
- ファイル名を省略すると、やはり端末から文字列を読み込んでパターンを検索する。

実習19

● パターン検索

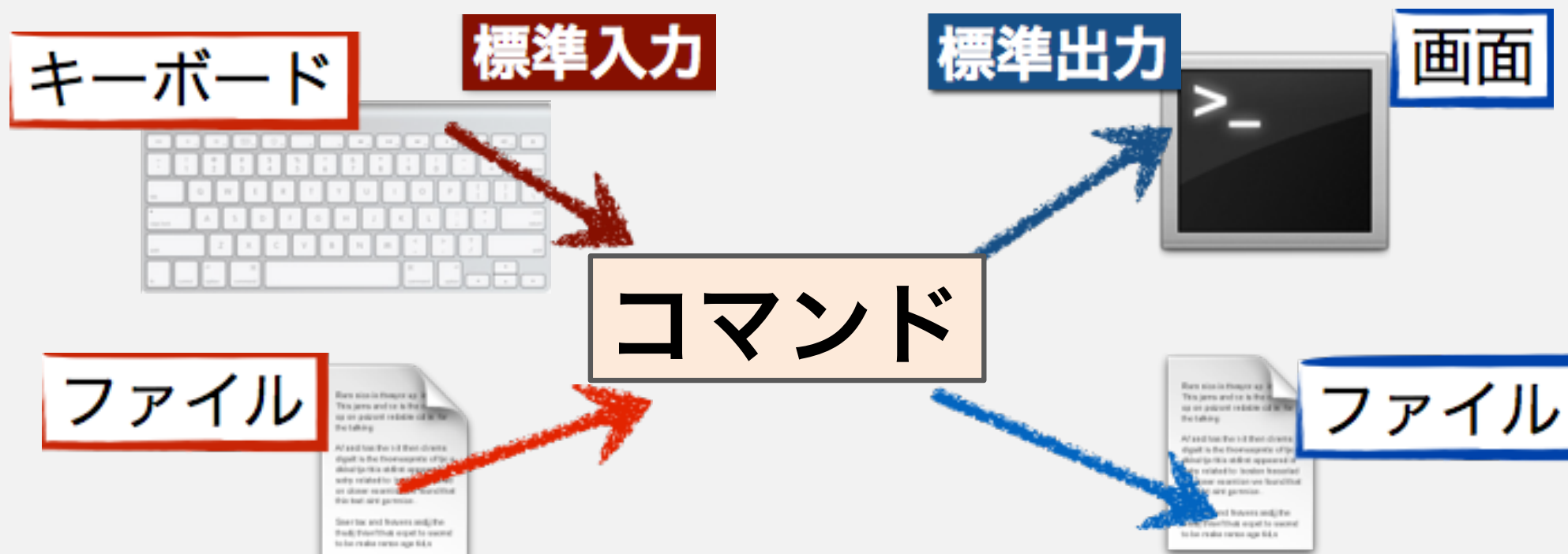
(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. 1433B_HUMAN.sprotの内容をlessで確認し、GOとFTを検索する。
\$ less 1433B_HUMAN.sprot
2. 1433B_HUMAN.sprotから"GO"が含まれる行を表示する。
\$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot
3. 1433B_HUMAN.sprotからFeature table data(FT)の行を表示する。
\$ grep ^FT 1433B_HUMAN.sprot

入出力のリダイレクション

● リダイレクション

- コマンドへの入力元、出力先を切替える機能
- 標準入力=キーボード、標準出力=画面



エラー内容を入力する「標準エラー出力」もある

リダイレクションの例・出力

- 端末画面に出力

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot
```

- ファイルに保存 (>)

- コマンドの右側に ”> filename “ を加える
- 結果を GO_count というファイルに保存

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot > GO_count
```

(同名ファイルがある場合は上書きされる)

- 存在するファイルに追加書き (>>)

- コマンドの右側に ”>> filename” を加える

```
$ grep GO * 1433?_HUMAN.sprot >> GO_counts
```

(ファイルが存在しない場合は作成される)

リダイレクションの例・入力

- ファイルから入力

- コマンドの右側に “< filename” を加える
- wc コマンドで、GO_countファイルの行数を数える

```
$ wc < GO_count
```

```
(wc GO_count と同じ)
```

実習20

● リダイレクト

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. 1433B_HUMAN.sprotから"GO"が含まれる行を検索して、その結果をリダイレクト（出力）を使用してGO_countファイルに保存。

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot    (ファイル保存前に確認)
```

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot > GO_count
```

2. ファイルの中身をlessで確認する。

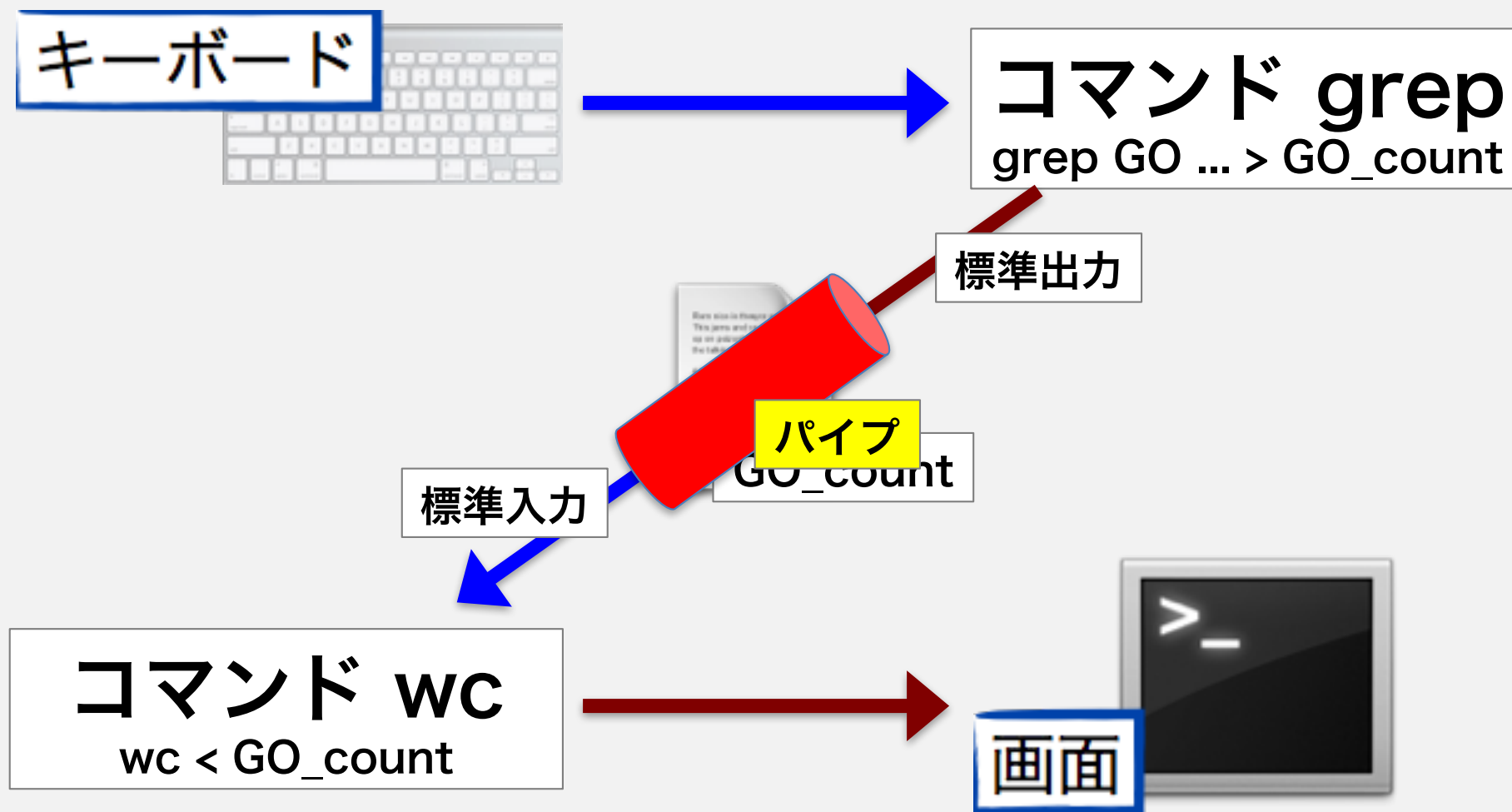
```
$ less GO_count
```

3. リダイレクト（入力）を使用してGO_countの単語数を数える。

```
$ wc < GO_count
```

パイプによるコマンドの結合

- コマンドの標準出力→標準入力をつなげる



パイプの例

- パイプはコマンド間を縦棒（|）でつなげる

- grep の出力行数をwcで数える

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot | wc
```

- grep の結果を less で見る

```
$ grep ^FT 1433B_HUMAN.sprot | less
```

- grepの結果をさらにgrepして絞り込む。

```
$ grep ^FT 1433B_HUMAN.sprot | grep HELIX  
| less
```

- コマンドはいくつでも結合できる

実習21

● パイプ

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

(検索対象は1433B_HUMAN.sprot)

1. “GO”を検索した結果をパイプを使用してwcで単語数をカウントする。

```
$ grep GO 1433B_HUMAN.sprot | wc
```

2. “FT”から始まる行を検索した結果をパイプを使用してlessで表示する。

```
$ grep ^FT 1433B_HUMAN.sprot | less
```

3. “FT”から始まる行を検索した結果から更に“HELIX”を検索してlessで表示する。

```
$ grep ^FT 1433B_HUMAN.sprot | grep HELIX | less
```


シェルスクリプト

- 一連のコマンドを実行順に記述したファイル

- スクリプトファイル、バッチファイル
- 例) data/bin/testpg の内容

```
#!/bin/sh  
pwd  
ls -la
```

- 実行

- ファイルを単体で実行させるためには実行権が必要

```
$ chmod +x testpg
```

- 実行するときはパスを省略せずに入力

```
$ ./testpg
```

もしくは /home/<user>/data/1_unix/sprot/testpg

- コマンドサーチパスに登録されているディレクトリに保存すれば、コマンド名のみで実行できる。

実習22

● シェルスクリプト

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. ~/data/1_unix/bin/testpgをカレントディレクトリにコピーする。
\$ cp ~/data/1_unix/sprot/testpg .
\$ less testpg
2. testpgを実行する。(相対パス／絶対パスのいずれかを付けて実行)
\$./testpg ("Permission denied"のエラー)
3. 実行権がなくエラーとなるため、実行権を付与する。
\$ ls -l testpg (実行権の確認)
\$ chmod +x testpg
\$ ls -l testpg
\$./testpg
4. パスを付けずに実行した場合の動作を確認する。
\$ testpg ("command not found"のエラー)

コマンドサーチパス

- コマンドサーチパス

- パスなしのコマンドは、「コマンドサーチパス」に登録されているディレクトリのリストから探し出される

パスなし → "ls"、パスあり → "/bin/ls"

例) ls コマンドは /bin/ls の下にある

- PATH変数

- コマンドサーチパスが格納されている変数
- 通常 ".bash_profile" で設定する
- コロン (:) 区切りで複数のパスをつなげて指定
- 内容は "echo \$PATH" コマンドで確認できる
 - echoコマンドは、引数の内容を標準出力に出力
- 同じ名前のコマンドが複数のパスに存在すると、最初のパスが優先される

- エラー "Command not found"

- プログラムが (正しく) インストールされていない。
- コマンドサーチパスが正しく設定されていない。

コマンドサーチパスの設定

● 一時的に設定する場合

- PATH変数にコマンドサーチパスを加える

```
PATH=$PATH:~/bin
```

(変数を見るときは\$を付けて、変数へ代入するときには付けない)

既存のPATH変数の後に “~/bin” を加える

● 恒常的に設定する場合

- ファイル ~/.bash_profile に設定を書き込む

```
PATH=$PATH:~/bin
```

.bash_profileはログイン時に実行されるファイル

実習23

● コマンドサーチパス

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. 現在のコマンドサーチパスが格納されているPATH変数を確認する。

```
$ echo $PATH
```

2. コマンドサーチパスに登録されているディレクトリの中身を確認する。

```
$ ls /bin
```

3. ~/binがコマンドサーチパスに登録されていることを確認する。

```
$ PATH=$PATH:~/bin
```

自身で作成したコマンドを~/binディレクトリへコピーすることによって、パスの記述なしでコマンドを呼び出す事ができる。

4. 前の実習で使ったtestpgを~/binディレクトリにコピーしてパス無しで動作するかを確認する。もし~/binディレクトリが存在しない場合は作成すること。

```
$ cd
```

```
($ mkdir bin) #必要に応じて作成
```

```
$ testpg #エラーになる
```

```
$ cp unixtest/testpg bin
```

```
$ testpg
```

エイリアス(alias)

- alias 別名=コマンド名
- コマンドの別名を作成する
 - lsの初期オプションを"-a"(隠しファイル表示)にする

```
$ alias ls='ls -a'
```
 - rmの初期オプションを"-i"(確認あり)にする

```
$ alias rm='rm -i'
```
- エイリアスを取り消す
 - ls のエイリアス設定をクリアする

```
$ unalias ls
```
 - バックスラッシュ(¥)でエイリアスを一時的に取り消す

```
$ ¥ls
```
- 設定済みエイリアスの一覧表示

```
$ alias
```

実習24

● エイリアス

(カレントディレクトリは ~)

1. エイリアスを使ってlsの動作を”隠しファイル表示 (-a)且つファイル種類表示(-F)に変更する。

```
alias ls='ls -aF'
```

2. 現在設定されているエイリアスを確認する。

```
alias
```

3. エイリアスではない本来のlsを実行した結果を比べてみる。

```
$ ls
```

```
$ ¥ls
```

4. rmコマンドのオプション設定を確認あり (-i) にする。

```
$ alias rm='rm -i'
```

5. unixtest/1433B_HUMAN.fastaを削除、エイリアスされたrmの動作を確認する。

```
$ rm unixtest/1433B_HUMAN.fasta
```

確認を求められるので、良ければ”y”と入力、それ以外の文字を入力するとキャンセルとなる。

.bash_profileと.bashrc

● シェルの動作を変更する設定ファイル

- 環境変数やエイリアスの設定を記述する。
- 設定ファイルには.bash_profileと.bashrcがある。
- .bash_profileはログイン時に一度だけ実行される。
- .bashrcはシェルを起動する度に実行される。
- 隠しファイルで通常はlsで表示されない。

● 環境変数とシェル変数

- 環境変数はシェルから実行したコマンドにも引き継がれる
設定例：\$ export HOGE=hogehoge
- シェル変数は現在実行中のシェルだけに有効な変数
設定例：\$ HOGE=hogehoge

メタキャラクタ

- シェルにとって特別な意味を持つ記号

例) * ? [] < > | ! \$; & 等

- 引数に現れる時は要注意

- スペース、メタキャラクタ
- 引数全体を引用符 (') で囲む
特別な意味を抑止する
- 下記例はリダイレクトによりファイルを上書きする
(誤) `$ grep ^> 1A01_HUMAN.fasta`
(正) `$ grep '^>' 1A01_HUMAN.fasta`

- ファイル名の付け方

- 英数字、ドット (.), アンダーバー (_), ハイフン (-) を使用
- 上記以外の記号、2バイト文字(日本語)は使用しない

実習25

● メタキャラクタ

(カレントディレクトリは ~/)

1. `grep ^> 1A31_HUMAN.fasta`の動作を確認する。

作業ディレクトリは~/unixtestとする。

```
$ cd unixtest
```

念のためコピーしたファイルを使用する。

```
$ cp Human/1A31_HUMAN.fasta .
```

```
$ grep ^> 1A31_HUMAN.fasta
```

2. 結果が戻ってこないなので、適当な文字を入力し、Control-Dで終了する。

このコマンドラインは、キーボードから入力された文字列から行頭(^)を検索して1A31_HUMAN.fastaファイルにリダイレクト出力(>)するという意味になる。

ジョブの中止と中断

- コマンド（ジョブ）の実行中
 - 端末は結果待ち状態
 - 端末からの入力を受け付けない
 - 実行が終了すると、プロンプトを表示

- 実行中のジョブを途中で中止

- コントロールキーを押しながら "C"

Control + C

- ジョブを一時中断

- コントロールキーを押しながら "Z"

Control + Z

- 実行中のジョブを確認

- jobs コマンド

```
$ jobs
```

```
[1]-  Running      yes > /dev/null &
```

```
[2]+  Stopped      yes > /dev/null
```

- 一時中断したジョブを再開

- fg : フォアグラウンドで再開
(端末は結果待ちの状態)

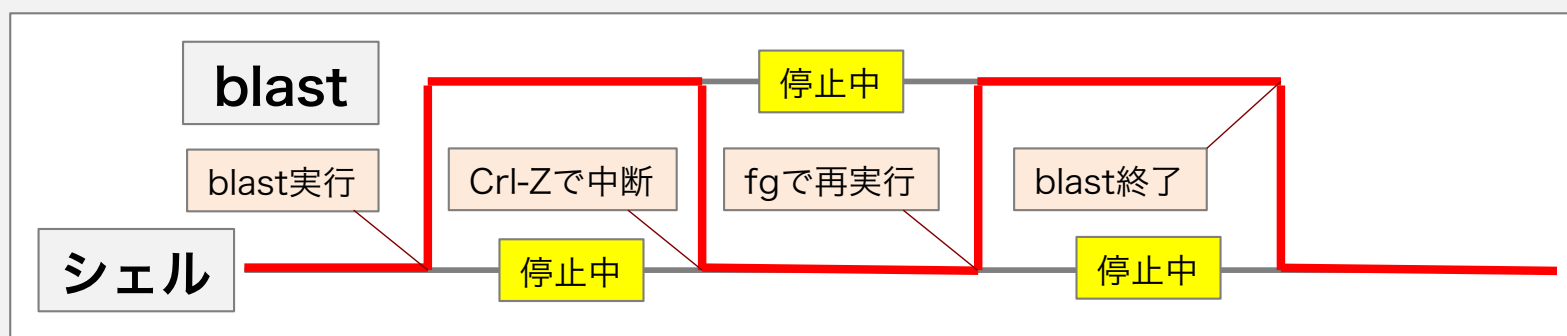
- bg : バックグラウンドで再開
(端末からの入力ができる)

はじめからバックグラウンドでジョブを実行するには、コマンド行末尾に "&"

フォアグラウンドとバックグラウンド

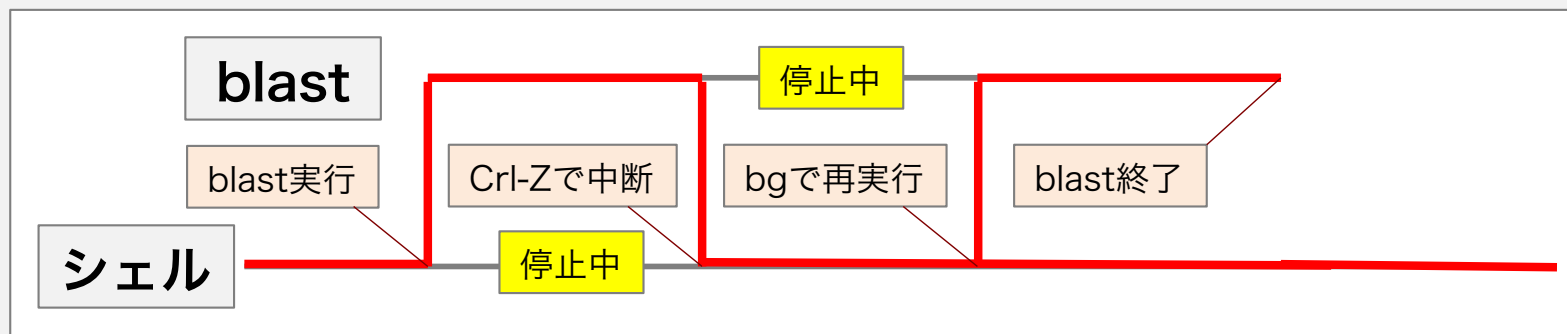
● フォアグラウンド実行 (fg)

- 実行中はコマンド入力を受け付けない



● バックグラウンド実行 (bg)

- 実行中でもコマンド入力が可能



プロセスの表示と停止(ps,kill)

● プロセス

- OSが管理する単位
- ジョブはシェルが管理する単位

● プロセスの一覧表示

- ps コマンド

PID: プロセスID, TTY: 端末

TIME: CPU時間, CMD: コマンド

```
$ ps
  PID TTY          TIME CMD
218074 pts/12    00:00:00 bash
223974 pts/12    00:00:01 ls
223975 pts/12    00:00:00 ps
```

● 実行中のプロセス停止

- kill PID...
- PIDをpsで調べて停止

```
$ kill 223974
$ ps
  PID TTY          TIME CMD
218074 pts/12    00:00:00 bash
223980 pts/12    00:00:00 ps
[1]+  Terminated ls -lR /
```

プロセスの稼働状況を把握(top)

● top

– UNIXマシンの稼働状況をリアルタイムに表示

```
$ top
```

```
Processes: 276 total, 3 running, 13 stuck, 260 sleeping, 1604 threads 15:41:31
Load Avg: 1.98, 2.24, 2.22 CPU usage: 3.46% user, 1.47% sys, 95.5% idle
SharedLibs: 1604K resident, 0B data, 0B linkedit.
MemRegions: 183073 total, 8815M resident, 143M private, 3238M shared.
PhysMem: 15G used (2148M wired), 6234M unused.
VM: 711G vsize, 1026M framework vsize, 18564(0) swapins, 72355(0) swapouts.
Networks: packets: 69788526/45G in, 43784897/21G out.
Disks: 14135478/253G read, 30377589/763G written.
```

PID	COMMAND	%CPU	TIME	#TH	#WQ	#PORTS	#MREGS	MEM	RPRVT
95057	installd	0.0	00:11.75	2	0	53	161	12M	12M
95056	suhelperd	0.0	00:05.01	2	0	58	164	5840K	5448K
95054	softwareupda	0.0	01:45.06	11	0	175	372	96M	95M
87334	plugin-conta	0.0	00:30.01	6	1	230	182	3344K	2748K
87088	mdworker	0.0	00:00.07	4	0	54	80	6264K	5392Ks

– 終了する時は“q”を押下

実習26

- プロセスの確認

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. psコマンドを使用して、プロセス一覧を表示する。

\$ ps

2. topコマンドを使用して、プロセスの稼働状況を確認する。

\$ top

リモートファイルコピー(scp)

- scp コピー元 コピー先

- ネットワーク経由のファイルコピー

- ```
$ scp test.txt user@bias4.nibb.ac.jp:data/test.txt
```

- リモート先の指定方法

- ```
user@host:<where_to_copy_path>
```

- コピー先、コピー元いずれかに指定する

- r オプションはディレクトリ丸ごとコピー

- <where_to_copy_path>省略時はホーム直下にコピー

- cpコマンドと同じ感覚で利用できる

実習27

● scpの実習

(カレントディレクトリは ~/unixtest)

1. ターミナルで新しいウィンドウを開く

2. bias4から~/data/1_unix 全てをmacにコピー

```
$ scp -r <user>@bias4.nibb.ac.jp:data/1_unix .
```

3. コピーしたファイル群のうち、1_unix/bin/testpg を、macからbias4へコピー、名前はtestpg2としホームディレクトリ直下にコピーする

```
$ scp 1_unix/bin/testpg <user>@bias4.nibb.ac.jp:testpg2
```

ファイル転送(ftp)

● ftp リモートホスト名

- 対話形式によるファイル転送
- 公開FTPサーバ(Anonymous FTP)利用の慣行

ユーザ名: anonymous, パスワード: メールアドレス

コマンド	用途
ls	リモートのファイル一覧表示
lls	ローカルのファイル一覧表示
cd	リモートのディレクトリ移動
lcd	ローカルのディレクトリ移動
get	ファイルをリモートからローカルに転送
mget	複数のファイルを転送。ワイルドカード使用可
put	ファイルをローカルからリモートに転送
mput	複数のファイルを転送。ワイルドカード使用可
help	使用できるコマンドの簡易ヘルプ

データ転送(curl)

● curl URL

– HTTPやFTP経由のファイル取得

```
$ curl http://www.nibb.ac.jp
```

www.nibb.ac.jpのトップページを標準出力に書き出し

オプション	用途
<code>-o file url</code>	urlのデータをfileに保存
<code>-o</code>	url上のファイル名で保存 (http://hoge.com/fig.jpgのように「ファイル名がある」urlのみ)
<code>-o url[start-end]</code>	http://www.hoge.com/[01-10].jpg等とすることで、01.jpg, 02.jpg, 03.jpg ... 10.jpgのファイル全て取得
<code>-h</code>	ヘルプを表示

ファイルの圧縮と解凍

- データ圧縮

- 圧縮アルゴリズムを使い、情報を失わずサイズを小さくする
- 圧縮ファイルは使用する前に元に戻す（解凍）

- gzip（拡張子：.gz or .Z）

圧縮：gzip ファイル名（ファイル名.gzを作成）

解凍：gunzip ファイル名.gz または gzip -d ファイル名.gz

- bzip2（拡張子：.bz2）

圧縮：bzip2 ファイル名

解凍：bunzip2 ファイル名.bz2 または bzip2 -d ファイル名.bz2

アーカイブの作成と展開(tar)

- アーカイブ

- 複数のファイルやディレクトリを1つのファイルにまとめること
- 圧縮と組み合わせて、データ配布やバックアップ保存などに用いる
- 通常アーカイブファイルは拡張子 .tar をつける

- 基本的な使用方法

- dir を archive.tar としてアーカイブ

```
$ tar cvf archive.tar dir
```

c: 新しいアーカイブを作成

v: 処理したファイルの一覧を出力

f file: fileというアーカイブ・ファイルを使う

- archive.tar をカレントディレクトリに展開

```
$ tar xvf archive.tar
```

x: アーカイブからファイルを抽出

- 圧縮・解凍の同時実行

```
$ tar zxvf archive.tar.gz
```

z: gzipで圧縮・解凍の処理を行う、j: bzipで圧縮・解凍の処理を行う

実習28

● 圧縮アーカイブの作成と展開

(カレントディレクトリは ~)

1. 先ほどの~/backup/unixtestディレクトリの圧縮アーカイブを、~/backup/unixtest.tar.gzという名前で作成する。圧縮形式はgzip形式を使用し、作成後は元のディレクトリを削除する。

```
$ cd backup
```

```
$ tar zcvf unixtest.tar.gz ./unixtest
```

```
$ rm -rf ./unixtest
```

2. unixtest.tar.gzの内容を確認する。

```
$ tar ztvf unixtest.tar.gz (tオプションは内容をリスト表示)
```

3. ~/backup/unixtest.tar.gzを~/backupディレクトリ内に解凍展開する。

```
$ tar zxvf unixtest.tar.gz
```

お疲れさまでした

この講習で使用したコマンド一覧は
資料末尾に添付しましたので
参考にしてください。